三月

宝栄光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
三月

【Ｎコード】
Ｎ８７７４Ｊ

【作者名】
宝栄光

【あらすじ】
季節は三月。卒業式。
俺は、誰のことが好きなんだろうか。

（前書き）

課題小説の一環として書き上げました。
展開が速いですが、あまりにも早すぎますが、見ていただけると幸いです。

それは、冷たい雨が春を遠ざけるとても寒い日の出来事だった。
卒業式と言えば、桜舞う春、暖かな春の陽気に包まれて在校生に別れを惜しまれながら、あるいは祝福されながら堂々と胸を張って今まで学んできた学び屋が母校と呼べるものになる。
それが、ドラマやマンガなどでよく見る卒業式のシーンだ。
だが、俺たちはそんな普遍的な卒業式ではない。近年急速に農村部の過疎化、都心部への過密化が進む中、俺たちの住む地域も例外ではなかった。さらにそれに少子化問題が加わればなおさらのことになるだろう。
俺たちの通うこの中学校は今年で廃校が決まっている。つまり、俺たちが最後の卒業生となるのだ。よって、在校生など居るわけもなく、それでも桜舞い散る今日を見事な青空が出迎えてくれるすばらしい日を期待していたのだが。どうやら天まで俺たちの卒業を祝ってくれないらしい。どんよりと暗い空が暗幕をしかれた体育館をよりいっそう闇に染めていた。
在校生送辞が諸先生方送辞に変わった。生徒会長がそれに答えた。歌を歌い校歌を歌った。音楽教師が卒業式予行のときに「校歌が歌えるのは明日で最後です」と言っていたが、全くもってそう思う。
だって、明日からこの学校はただの廃棟となるのだから。
式が終わり、俺たちはそれぞれのホームルーム教室へ向かう。そこで各クラスの担任から最後の話を聞かされる。感情深い人だから、きっと言葉にならないのだろうと思う。
「霜月〜！」
一列に並んで退場する体育館。しかし、その体育館を出ると同時にその列は線路の引かれていない電車のように崩れる。
それは彼女も同じことだったようで。
「何だよ、如月」

皆が目いっぱいに涙を溜めているのに彼女はいつもと変わらずすこぶる元気だった。まぁ、それは俺も変わらないことなのだが。
「霜月ぃっ！　やっと卒業だな」
「やっとって、おまえずっと中学生がいいと言っていただろう？」
「そんなもん言った覚えないわっ！」
はっきりと何回も何回も俺に言っていたではないか。それをあくまでも言っていないと言い張る気か。
如月は俺の頭をバシバシ叩く。別にいたくもない、じゃれ合いという表現が的確か。
「うるさいうるさい、言ってないものは言ってない！」
まるで三歳時のようにだだをこねる。如月は教室に入るまでの道中ずっと「言ってない」と言い続けていた。
「皆さんは今日のよき日に我が校の最後の卒業生としてそれぞれの道に立っていくわけですが……」
担任の話も校長のそれとよく似たものだった。なにがみんなそんなに悲しいのか、なにが悲しくて泣くのか俺には分からなかった。別に俺が特別感情に乏しいわけではない。皆がありすぎるのだ。と、俺はそう思う。
生憎と言うべきか。俺と同じような者がもう一人居るから。
彼女は頬杖をついてしとしと降る雨を眺めていた。
妙なことにこの後、クラス会を行うらしい。別にそんなもの行わなくていいのだが、なぜかいつのまにかそういう話にまとまっていた。昨日の予行のときだ。
だから今日はジュースやお菓子やいろいろなパーティーグッズが卒業式前からあった。
先ほどまで泣いていたクラスの者も、笑顔を落とす者まで居る。
別に俺は何とも思わない。それは彼女も同じようだった。
如月の誕生日会（我がクラスでは毎月誕生日会を行っている。三月は如月の誕生日だ）と、クラスのお別れ会。
別にお別れ会たってほとんどの人が同じ高校に進学するのだ。離

れたって、皆に会おうと思えばまた会える。それとも、本当に永遠のお別れ会（離れるともう二度と会いませんよという意味の）でもするのだろうか。
　それでも、ま、如月の誕生日会だ。俺も気合いを入れて彼女をエスコートしなければ。
「そういえばさ、霜月。弥生にはもう告白はしたのか？」
「……まだ……」
「……弥生、都会の高校に行くんだろう？　本当に今日逃したら告白する機会なんてなくなるぜ」
「分かってるよ！　ごちゃごちゃ煩いな」
「霜月、昨日告白すると言っていたではないか」
　如月の言う、弥生は話の筋からも分かるように俺の好きな女の子。姿容が非常に整っており、クラスでも人気の高い彼女は男子からすれば羨望の的だった。
　彼女はこの春から音楽科のある県庁所在地のある遠くの高校へ進学することが決まっている。
　本当に今日という日を逃してしまえば、彼女に逢える日はいつになるのだろうか。
「煩いな、するよ、ちゃんと」
　昨日は絶対すると決めていた。なぜ今日になってこんなにもためらう自分が居るのだろうか。
「本当か？」
「本当」
「……じゃあ、おまえの告白見守るからな」
　彼女は俺のこの恋を応援してくれると言った。必ず成功させてみせると言った。これほどまでにどうして俺の恋を応援してくれるのか。それは単に俺と如月が仲がいいだけではなく、弥生ちゃんとも大の親友ということも関係しているのだろう。
　クラス会は……、ふむ。なるほど。クラス会はとても楽しいものだった。如月が誕生席（如月のために作られたといっても過言では

ない、玉座のように豪華な椅子。と言っても手作りなのだが）に座ってその無邪気な笑顔を振りまいていた。弥生ちゃんの影に隠れてしまっているが、彼女もまた可愛いと呼ぶに相応しい女の子なのである。

……おそらく、他のクラス、学校ならば如月は俺たちのクラスの弥生ちゃんのような立場になっていたに違いないのだ。

皆でジュースを乾杯し、お菓子を食べる。ゲームをしたりおしゃべりをしたり。雨は一向に止まないが、それでも楽しかった。外は薄暗いが、教室の中はまるで晴天の日にピクニックにでも行ったようなそんな感じの明るさだった。

楽しい時間も終わり、皆で片づけを。そこに如月の姿はなかった。片付け＝解散。それが普通の等式だ。だが、メインイベントはこれからだったようだ。

「霜月くん……」

弥生ちゃんだ。

「……前からあなたのことが好きでした」

「……え？」

これは、何の疑いもなく考えたほうがいいのだろうか。ドッキリ……とか、そういうのじゃないよな……。いや、そう思いたい。そう思わせてくれ。

きっと、如月の仕業だ。その、如月はどこに行った？　お礼を言わなくては。きっと、彼女は知っていたんだ。弥生ちゃんと俺が相思相愛だということを。だから、彼女には絶対的な自信があった。

「こちらこそ、よろしく……」

まさか、俺が告白するのではなく、告白されるとは思ってもいなかった。しかも、皆の目の前で突然のことである。するほうも恥ずかしいだろうが、されるほうも恥ずかしい。まして、断ることが許されないような雰囲気が無言のプレッシャーとして圧し掛かる。なるほど、あいつのしそうなことだ。なのに、なぜ、プロデューサー本人がこの場に居ないのだ。

クラスは今日一番の盛り上がりを見せている。俺は男子諸君から袋叩きにされるし、弥生ちゃんは女子からまるで花嫁のように祝福されている。だけれど、仲人役の如月が居ないのであれば元も子もないだろう。

如月はトイレかとも思ったが、こんなにも長いトイレなわけない。適当に、一人椅子を一生懸命片付けている勤勉男子に聞いてみることにした。

「なぁ、如月、見なかったか？」

「如月さんなら、帰ったよ」

帰った……？　そんな、なんで？

「それは、いつ、何分前！？」

「結構前だと思うけれど」

分からない。あいつのすることの意味が分からない。立場が逆になったが、彼女は俺の告白を見守ると言ったではないか。

なのに、なぜ先に帰る。今日だって、一緒に帰ると約束したではないか。傘を忘れたから一緒に傘に入れてくれそう言ったではないか。

なぜだ。なぜ俺は廊下を走っているのだろう。どうして傘も差さずに彼女を追いかけるのだろう。

先程よりも雨足を強めた横殴りの雨が俺の身体に当たり髪を、肌を、服を濡らす。

彼女を追いかける理由。それは単に彼女が雨に濡れ、風邪をひくと思ったからではない。どうして彼女は傘を忘れたなんて嘘をついてまで俺と帰りたいと言ったのか。

まさか、彼女自身俺のことを……。

違う。その逆だ。

今まで何気なく彼女の横に居座り、彼女の傍に居続けた。気付かなかったわけではない。気付きたくなかったのだ。

――如月珊瑚が好きなのだと。

この関係がよかった。何も言わずに彼女の隣に居座り続けられる

この関係がよかった。弥生ちゃんへの告白を躊躇っていたのだって、告白するのが恥ずかしい、フラれたらどうしようと考えていたわけではないのだ。彼女のことが本当に好きだったから、躊躇した。

だから俺は無理に別の好きな人を作った。心からではない。上辺だけの好きな人を。それで、如月は俺の好きな人ではないと自分を錯覚させた。そうすることで、張り裂けそうな気持ちを抑えていた。もし、俺が今追いかけている人物が仮に弥生ちゃんだとすれば、果たして俺はこのように追いかけただろうか。

校門手前のつぼみすらつけていない桜の木の下、彼女は居た。傘も差さず冷たい雨に打たれていた。

「珊瑚っ！」

俺が親しい間柄でありながらも彼女のことを名前ではなく苗字で呼んでいたのも俺の無理隠していた彼女への好きという気持ちを抑えるためである。

だから、彼女の名前を呼ぶのは初めてだった。

「……翡翠……？」

彼女は俺の姿を見ると逃げた。「来ないで、来るな、来るな！」そう叫びながら。途中何度も転びながら。いつもなら大泣きして俺に助けを求めてきたのだが、すぐに立ち上がり、泥にまみれながらも彼女は俺から必死に逃げた。

が、そこは男子と女子の差。次第に彼女との距離は縮まり、校庭の真ん中、彼女の片腕を掴んだ。それでも彼女は必死に俺から逃れようと暴れる。どうしてそこまで暴れる必要がある……。

「珊瑚、俺はっ」

「いやっ！」

「俺は、本当はおまえのことが好きだっ！」

他の誰よりも「好き」という二文字を彼女に伝えたかった。伝えた後の二人の関係の崩壊が怖くて伝えられなかった。

珊瑚は逃げた。逃げていたのは俺だった。

「……なんで」

珊瑚はポツリと呟いた。
「どうして？　霜月は……、翡翠は、弥生のことが……」
「好きだよ。でも、それ以上に珊瑚のことが好きだ。俺がおまえを想う気持ちは相対的な位置じゃない。絶対的な位置にある」
珊瑚は暴れるのをやめ、俯いた。
「どうして、どうして……」
顔を上げたときの彼女の頬を流れる水滴は雨なのか涙なのか。
「どうして今なの……」
「……」
「今まで押し殺してきたわたしのこの気持ち、この努力を翡翠は台無しにした！」
「……ごめん。俺は珊瑚とのこの関係が壊れるのが怖くてずっと自分に嘘をついてた。そして、珊瑚にも」
珊瑚は濡れた袖で目の辺りを拭うと、
「わたしも同じだ、翡翠。わたしも翡翠のことが好きだった。だけれど、翡翠との関係が崩壊するのが怖くて『好き』だと言えなかった。だけれど、そうか、翡翠もわたしのことを好きと想っていてくれたんだな」
珊瑚は灰色の低い空を見上げた。
「改めて言うよ、翡翠。わたしも翡翠のことが好きだ」
「でも、」
俺が言葉を出す前に珊瑚は繋げた。
「無理なんだ」
「……え？」
「無理なんだ……」
悲しそうに彼女は呟いた。
「だから、聞きたくなかったんだ。でも、やっぱり、翡翠が結ばれるのも見たくなかった。だからこっそり逃げてきたというのに……」
「そりゃ、弥生ちゃんには申し訳ないと思う。だけれど、言い方悪いけれど断ればそれで済む話じゃないか」

「違うんだ」
珊瑚は俺を突き飛ばすように言った。
「違うんだ、翡翠。わたしは、父親の都合で四月から東京に行くんだ」
「……え？」
聞いてないぞ……。
「言ってないから」
「……なんでだよ、何で言ってくれなかったんだよ」
「言えば、翡翠がますますわたしに優しくしてくれそうだから。翡翠との想い出を抱いたまま向こうに行くのは、嫌だったから」
彼女がずっと中学生のままで居たいという理由も分かったような気がする。
「どうして」
「翡翠のことが忘れられないからに決まっているだろう！　翡翠なんて最初から居なかった。そう思うしかなかったのだ。そうでなければわたしは壊れてしまう。だから、せめて翡翠には幸せになってほしかったのだ。それに、翡翠が弥生と付き合えば諦めがつくと思ったから」
珊瑚は俺の胸の中へ埋まった。
「でも、今だけは、今だけはわたしを恋人にしてくれるか？　翡翠……」
「……あぁ」
雨に打たれながら俺たちは唇を重ね合わせた。今日という日を忘れないために、いつまでもいつまでも……。
結ばれないと分かっているなら、どうかこのまま時間を止めてしまいたい。
だけれど、時の流れは残酷で、卒業式からもう三年経った。高校の卒業式は三年前と違って小春日和と呼ぶに相応しい日になった。
本当に好きな人と結ばれるのは難しい。どこの誰だが言った言葉かは分からないが俺はそんな言葉を聞いたことがある。

それは、本当だ。
結局俺は弥生ちゃんとは三年間付き合っている。珊瑚がくれたこの幸せ。珊瑚が願ったこの幸せ。
今、彼女がどこで何をしているのか分からない。だけれど、俺はふと思うことがある。
珊瑚は今でも俺の傍にあの頃と変わらないまま居るのだと。それが、あの日俺と彼女が交わした約束だから。

（後書き）

宝栄光にも似たような体験がありました。あまりにも仲良くなりすぎると、今度は逆に告白し辛くなるんですよね……。

告白して万が一にでも断られると、もうきっとこんな感じで笑いえないんだって考えてしまいます。そんな経験皆さんにはないですか？

……あれ？　僕だけ？

うーん、おかしい……。きっと、誰もが経験したことなのだと思ったんだけどなあ……。

さてさて、男性の読者の方、バレンタインデーはいかがでした？

いろいろな方が居ると思いますが、宝栄光は一番貰いたかった人から貰えずに意気消沈しています。やっぱり、二月十四日は魔力ですね。普段は逆チョコや友チョコしているんですけども、今年はバイトが忙しくて出来ませんでした。

ホワイトデーにはきっとチョコレートを作って渡してあげようと思います。もう、レシピは頭の中にあるので、あとはお金ためて作るだけです☆

と、言っても給料日まであと三十日。やっていけねえ……。

宝栄光もあと二十日で卒業式を迎えます。卒業はやっぱりいいですね！

２０１０年０２月１５日　宝栄光

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8774j/

三月

2010年10月8日15時11分発行